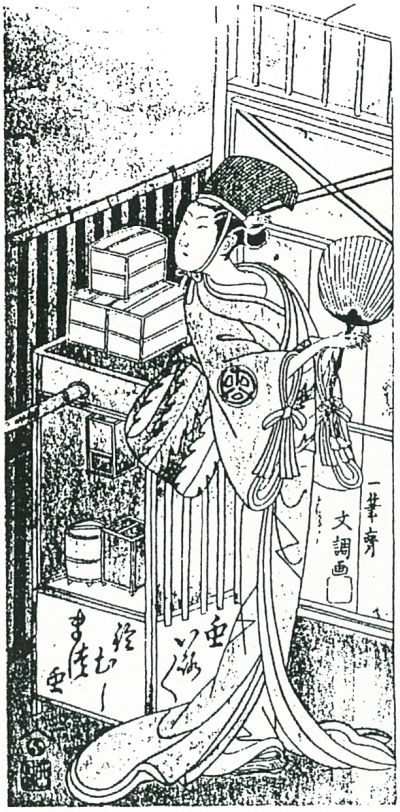
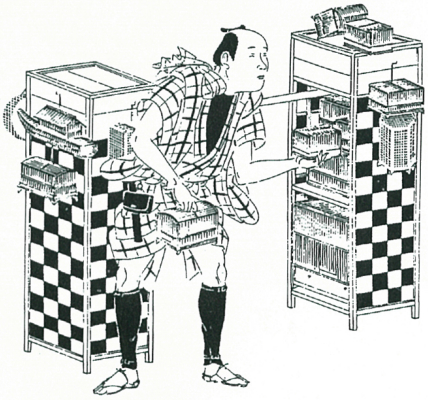
■虫売り

戦前までは、夏の縁日には、虫屋がさまざまな格好の虫かごをつるして店を出していました。キリギリスの流し売りの声が夏の風物詩にもなっていました。

十七世紀の末頃、上方で始まったこうした「虫売り」の仕事は、はじめは野で捕らえた虫を売るという素朴なものでしたが、十八世紀末ごろ鈴虫の増殖に成功して以来、カンタン、マツムシ、クツワムシなどの人工飼育もできるようになり、「昆虫産業」として発展を遂げました。かめの土に産卵させ、あたためた部屋において、自然のものよりも早くかえす促成飼育の技術も生まれました、この方法で育てられた鳴く虫は、「あぶり」（あたためられたもの意味）と呼ばれ、とくに高値で売買されました。千葉県長生郡岩沼で飼育された鳴く虫は、江戸時代より「岩沼虫」の銘柄で知られ、いまでも大量の鈴虫や松虫、キリギリスなどが東京の虫問屋に出荷されています。





虫 売（江戸職人歌合）

■鈴虫と松虫

平安時代はチンチロリンと鳴く松虫を鈴虫、リーンリーンと鳴く鈴虫を松虫と呼び、これが江戸時代になると逆になったとされています。貝原益軒の大和本草（一七〇九年）の鈴虫の項には「形、西瓜ノ種ノ如ク扁クシテ色黒シ…ヒゲ半白ク…」とあり、大阪の医者寺島良安の和漢三才図会には、松虫はチロリンコロリンと鳴き、鈴虫はリリリンリリリンと鳴くと述べているのは現在と同じです。でも、古来の呼び名を正統とする文献もあり、江戸時代には両説が混在していたようです。

寺島良安『和漢三才図会』（一七十三刊）より
右 松虫、左 鈴虫